

## 知覚経験は時間的に 延長しているのか

西村正秀

Seishu Nishimura

滋賀大学 経済学部 / 准教授

ある知覚的刺激が取り下げられた直後に別の知覚的刺激が与えられた場合に、後者の刺激が前者の刺激に関する知覚を変化させる現象は、「ポストディクティブ効果 (postdictive effects)」と呼ばれる。ポストディクティブ効果の典型例としては、逆向マスクング(backward masking) (Breitmeyer and Ogmen(2000); Enns and Di Lollo(2000)) やフラッシュ・ラグ効果 (the flash-lag effect) (Eagleman and Sejnowski(2006)) や色彩ファイ現象 (the color phi phenomenon) (Kolars and von Grünau(1976)) などが挙げられる。ポストディクティブ効果が哲学的に興味深いのは、時間的に前に与えられた刺激に対する知覚経験の性格が、時間的に後に与えられた刺激による逆向きの影響によって決定されるという一見パラドキシカルな点にある。

ポストディクティブ効果をどのように説明するのかについては、様々な提案がなされている。近年 Ian Phillipsが提案している延長主義的説明 (extensionalist account) も、その一つである (Phillips(2011a, 2011b, 2014a, 2014b))。従来の説明では、知覚経験とはある瞬間における心的状態であり、その積み重ねが主体の意識の流れを構成すると見なされていた。それに対して、延長主義的説明では、知覚経験はそもそも時間的に延長しており、その延長を構成する各瞬間の知覚に対して「形而上学的に先行して」いると考えられる (Phillips(2011b), 398)。それゆえ、各瞬間の知覚は、時間的に延長した知覚経験から派生的に説明されることになる。この説明が正しければ、時間的に後に与えられた刺激 (S2) の知覚が時間的に

1) Alex Byrneは、多くの哲学者が使用している「知覚経験」の哲学的概念を、(1) 個別的な出来事であることと(2) 反省によって認識可能であることという二点を整理している (Byrne(2009), 431-32)。(1)については、本節で述べる点に注意すれば、妥当な特徴づけである。一方、(2)については、Byrneが指摘するように、知覚経験の透明性 (transparency) を考慮

前に与えられた刺激 (S1) の知覚に変化を及ぼす現象は、前者の知覚が時間を逆行して後者の知覚を変化させる過程としてではなく、単にS1からS2までの時間的延長を持った一つの経験が生成される過程として説明されるので、パラドクスは解消される。

本稿の目的は、延長主義的説明は十分な説得力を持っていないことを示すことである。論述は以下の順序で行う。第Ⅱ節では、知覚経験という概念について、幾つかの予備的注意を与える。第Ⅲ節では、Phillipsの延長主義的説明を解説する。第Ⅳ節では、延長主義的説明のライバル理論の一つであるオーウェルの説明を退ける。第Ⅴ節では、もう一つのライバル理論であるスターリンの説明に対するPhillipsの批判が成功していないことを示して、延長主義的説明とスターリンの説明の間で、どちらかを選択する決め手がないことを論じる。

## Ⅱ 知覚経験の特徴づけ

最初に予備的考察として、本稿で「知覚経験 (perceptual experience)」という語をどのような意味合いで使用するのかを説明しておく。知覚経験とは何かという問題は知覚の哲学における中心問題の一つだが、意外なことに、この語が何を意味しているのかについて明示的な説明が与えられていることは少ない。むしろ、「知覚経験」は専門用語としてではなく、赤いトマトを見ること、心地よいメロディを聴くこと、薬の苦さを味わうことなど、日常的に我々が知覚において意識している事柄の総称として使われていることが多い。しかし、知覚経験の概念を哲学的に分析する際には、幾つ

かの特徴が付与される (どのような特徴を付与するかは立場によって異なるが)<sup>1)</sup>。本稿では、知覚経験を「感官によって因果的に引き起こされることで出来事(events)を表象する意識的な心的状態」として特徴づける。以下、この特徴づけについて解説しておこう。

まず、「感官によって因果的に引き起こされた心的状態」というのは、知覚経験は視覚などの五感や固有受容系 (proprioception) といった感覚を直接の原因とした心的状態だということである。心的状態には、信念や期待など直接的には感覚に基づかないものもある。この特徴は、知覚経験をこれらの心的状態と区別するためのものである。次に、「出来事を表象する心的状態」というのは、知覚経験は表象内容を持つ心的状態だということである。このアイデアは、志向説(intentionalism)と親和性を持っている。知覚経験に関する哲学的理論にはセンス・データ理論や選言説など色々あるが、その中で志向説とは、知覚経験を信念とは別の命題的態度と見なす立場である。命題的態度とは、ある出来事を表象する心的状態のことである。例えば、「月にウサギが住んでいる」という信念は、月にウサギが住んでいるという出来事を表象する心的状態であり、実際に月にウサギが住んでいれば真、住んでいなければ偽となる。志向説では、知覚経験は信念ではないが、「あのトマトは赤い」などの出来事がある仕方では表象する心的状態だと見なされる。なお、出来事とはトマトや机などの対象(objects)とは違って、通常は一定の時間的延長を持っており、各時点において異なる様相を持ち得る個物だという点に注意されたい (Byrne (2009), 431)<sup>2)</sup>。

すれば、かなり疑わしい特徴づけである (*Ibid.*, 434)。知覚経験の透明性の詳細については、本稿第Ⅴ節を参照されたい。なお、本稿では検討しないが、Byrne自身は哲学的概念としての知覚経験について不要論を唱えている。

2) 出来事と対象の違いに関する詳細な説明については、Casati and Varzi (2010) を参照されたい。

知覚経験を「表象内容を持つ心的状態」と見なすアイデアは、現在多くの哲学者と心理学者に共有されている。ポストディクティブ効果を論じる哲学者や心理学者もその例外ではない<sup>3)</sup>。ただし、このアイデアを用いる際には、心的状態と表象内容を明確に区別しなければならない。両者の違いは、猫の絵とそれが表す猫の違いに対応する (cf. Harman (1990))。前者は絵具や紙でできた二次元の物体であるが、後者は三次元の動物であり、両者は全くの別物である。同様に、知覚における心的状態はある特定の脳状態で実装されるが、それが表象する内容は「赤いトマトが存在すること」といった出来事である。一般に、状態と内容が同じ性質を共有している必要はない。ポストディクティブ効果に関しても、両者が共に時間的に延長している保証はない。表象内容である出来事が時間的に延長している点については、多くの論者の間で意見が一致している<sup>4)</sup>。しかし、後で見るように、Phillipsのような延長主義者は心的状態自体も表象内容と並行して時間的に延長していると考えたのに対して、他の論者は必ずしもそのような考えを肯定してはいない。

### III Phillipsの延長主義的説明

では、ポストディクティブ効果に関するPhillipsの延長主義的説明を見てみよう。Phillipsが延長主義的説明を提出した主な動機は、Ned Blockが提案する「現象的意識は注意やアクセス意識をオーバーフローする」(Block (1997, 2005, 2007))という主張(以下、「オーバーフロー・テーゼ」)を批判するためであった(Phillips (2011a, 2011b))。オーバーフロー・テーゼは、部分報告法の結果を

説明するために提案された仮説である。部分報告法とは、アイコニック・メモリ(感覚記憶)を測定するための実験である(e.g., Sperling (1960); Averbach and Coriell (1961))。アイコニック・メモリとは、腹側視覚路における最初期の視覚記憶であり、そこでは大容量の情報のごく短時間(500ms以内)保持される(Hollingworth and Luck (2008); Irwin and Thomas (2008); Surprenant and Neath (2009); Philips (2011a))。通常、アイコニック・メモリに保存される情報はまだ概念化されておらず、視覚的注意を介して、次の段階の視覚記憶であるワーキング・メモリ(視覚的短期記憶)へと利用可能になることにより概念化されると考えられている(Hollingworth and Luck (2008); Prinz (2012))。アイコニック・メモリは極めて短時間しか持続しないので、我々がある刺激を知覚してからそれを言語的に報告する(つまり、刺激の情報がワーキング・メモリでコード化される)までの間に、その多くは喪失される。Sperling (1960)による部分報告法では、どれだけ多くの情報が失われたのかを推定するために、次のような実験が行われた。最初に、アルファベット(場合によっては数字も含む)が書かれた3行×3列や3行×4列の格子を被験者に短時間(50msなど)提示し、それを取り下げた直後に、各列に対応する音の一つをキューとしてランダムに提示する。被験者はキューによって指示された列にどの文字が書かれていたかを答える。3行×4列の格子を用いた実験では、キューがない場合には12文字中約4文字の正答率だったが、キューがある場合では一行(4文字)につき約3文字の正答率であり、そこから12文字中約9文字がアイコニック・メモリに保存されていると推測された。ところで、

3) 例えば、本稿で論じるPhillipsやMichael Tyeはこのアイデアを前提している。

4) Reid (1855), Dennett (1991), Crick and Koch (2003) など一部の論者は、知覚経験に関して、心的状態だけではなく表象内容も時間的に延長していないと論じる。Barry

Daintonは、この立場を「映画的モデル(cinematic model)」と呼んでいる(Dainton (2010))。この立場によれば、時間的に延長した出来事に関する知覚経験は、延長していない瞬間的な知覚が映画のコマ送りのように継起していることに他ならない。本稿では、この立場については検討しない。

キューを提示しない実験では、被験者は刺激を報告する前にはより多くの文字が見えていたと感じていた。キューは特定の列に視覚的注意を向けるために与えられているので、Blockはキューが提示される前のまだ注意が払われていない視覚では、被験者が認知的にアクセスできるよりも多くの見えが与えられていると考え、認知的にアクセスできる（つまり、言語的に報告可能な）意識を「アクセス意識」、認知的にアクセスはできないが感じられている意識を「現象的意識」と名付けて、上述のオーバーフロー・テーゼを唱えたわけである<sup>5)</sup>。

Blockのオーバーフロー・テーゼは一定数の賛同者を得ているが、幾つかの反対意見も提出されている。Phillipsは、Sperlingの部分報告法からオーバーフロー・テーゼを導くためには、次の二つの前提が必要だと診断する。

- (1) 「もし主体が指示された列で特定の三つの文字を正しく報告すれば、それは主体がこれら三つの文字を報告された特定の文字として意識的に経験していることを推測するための強力な証拠となる。」(Phillips(2011a), 207)
- (2) 「部分報告法において特定の条件[列]で見出される経験の特徴(aspect)はいかなるものであれ、たとえ他の列がキューで指示されていたとしても見出されていたであろう。」(Ibid.)

Phillipsはこれらの内、(2)を否定することによってオーバーフロー・テーゼを拒絶する。(2)が正しく見えるのは、キューが提示される前の刺激に関する知覚経験はキューとは独立に成立しているという前提を我々が受け入れているからである。しかし、Phillipsによれば、この前提を受け入れる必要

はない。なぜなら、最初の刺激(格子の文字)に関する知覚経験は、その直後に与えられる刺激(キュー)からの影響を受けて初めて成立するというポストディクティブ解釈が可能だからである(Ibid., 208-09)。ポストディクティブ効果の例として、第I節で言及した逆向マスキングを考えてみよう。逆向マスキングとは、ある刺激が与えられた直後に別の刺激を与えた場合、前者の知覚が後者の知覚によって妨害されて意識されなくなるという現象である。知覚経験を意識的な心的状態とした場合、二番目の刺激情報の影響が一番目の刺激情報を遮断した結果、二番目の刺激に関する知覚経験のみが生じたと考えられる。部分報告法の結果も、ポストディクティブ効果として解釈できる。キューの知覚がアイコニック・メモリに保存された格子の文字に関する無意識の情報に影響を与えることによって、結果としてある行に書かれた文字についての知覚経験が生じる<sup>6)</sup>。この知覚経験は、格子が与えられてからキューによって文字のアクセス意識が生じるまでの時間的な長さを持つ一つの心的状態として個別化される。それゆえ、この知覚経験は、別の行にキューが向けられて生じる知覚経験とは全く別の心的状態となる。このように考えれば、我々が(2)を受け入れる必要はなくなる。

だが、部分報告法に関して、オーバーフロー・テーゼとポストディクティブ解釈の両方が可能な仮説だとすれば、なぜ後者を選ぶべきなのだろうか。この問いに対するPhillipsの答えは、後者のみだが、部分報告法において視覚的注意が向けられる対象を統合的に説明できるというものである(Phillips(2011a), 211-15)。一般に、部分報告法では、キューは被験者の視覚的注意を格子の特定の列に向ける役割を果たすと想定されている。し

5) Blockと同じ部分報告法の解釈は、神経科学者のVictor Lammeも提出している(Lamme(2003))。

6) Coltheart(1980)によれば、アイコニック・メモリは可視的持続と情動的持続という二つの要素を含んでいる。前者は現象的性格を担う意識的な部分、後者は詳細な情報を保持する無意識の部分であり、両者は脳の別の部位で実装される。部分報告法で測定されているのは、無意識の情動的持続の方である。

かし、キューは格子が取り下げられた後に与えられる。そうすると、視覚的注意は一体何に向けられているのだろうか。この問題に対するポストディクティブ解釈以外の解答には、大別して、視覚的注意の対象を被験者が抱く格子の錯覚と見なす解釈(e.g., Tye (2006))と、視覚的注意の対象を被験者の記憶に保存されたイメージと見なす解釈(e.g., Dretske(2006))の二つがある。だが、これらの解釈にはそれぞれ難がある。まず、錯覚解釈に関しては、被験者がキューによる視覚的注意をそのような錯覚に向けているということは現象学的に偽である(Phillips(2011a), 212)。一方、イメージ解釈については、記憶イメージの形成に掛かる時間が、視覚的注意が作用する時間と合わないという問題がある(*Ibid.*, 213-14)。この解釈が想定している記憶イメージとは、アイコニック・メモリに保存された無意識の情報ではなく、被験者が視覚的に思い出すことができるイメージである。このようなイメージが形成されるには1500msかかるが、部分報告法でキューの影響が有効なのは格子の取り下げから300ms以内である<sup>7)</sup>。

議論のために、部分報告法に関してポストディクティブ解釈が正しいとしよう。ところで、ポストディクティブ解釈には幾つかのヴァリエーションがある。延長主義的説明は、その中で最も見込みのあるものとしてPhillipsが提唱するものである。Phillipsは延長主義的説明の優位性を、スターリン的説明との対比のもとで論じている(Phillips(2011a), 216-20)。スターリン的説明とは、Daniel Dennettが命名した立場であり、ポストディクティブ効果を、最初の刺激に関する知覚情報が無意識のレベルで一定時間保存され、その間に視覚的注意によって情報操作が行われて、最終的に一つの意識的

な知覚経験が登場するという仕方で説明する(Dennett(1991), 117)<sup>8)</sup>。部分報告法で言えば、時点t1で与えられた格子の知覚情報は、アイコニック・メモリに無意識の情報として一定時間保存される。その間にキューによって視覚的注意が介入し、特定の列の文字情報が時点t2において初めて意識的に表象される。この説明でポイントとなるのは、特定の列の文字情報に関する知覚経験は、あくまでもt2という瞬間における心的状態として成立するという点である。知覚経験を構成する心的状態自体は時間的に延長しておらず、時間的に延長した出来事をt2の時点から回顧的に表象している。スターリン的説明はポストディクティブ効果に関する標準的な説明であるが、Phillipsによれば、これは三つの問題を抱えている。第一に、スターリン的説明は、知覚経験の時間的構造を上手く説明できない(Phillips(2011a), 219)。第V節で詳しく論じるが、Phillipsは知覚経験を構成する心的状態は時間的構造を有し、それは表象内容の時間的構造と合致していると考えている(*Ibid.*; Phillips(2014b), 142-44)。スターリン的説明は知覚経験が時間的構造を有することは認めるが、その構造を表象内容だけに帰すので、心的状態の時間的構造を説明できない。第二に、スターリン的説明は、最初の刺激が提示されてから最終的な知覚経験が生じるまでに300msまでの遅延を措定するが、Dennettによれば、この遅延は知覚経験の形成において常に生じるわけではない(Dennett(1991), 122; Phillips(2011a), 219)。むしろ、知覚経験の形成において脳が情報処理するために要する時間から考えれば、300msの遅延は大きすぎると考えられる。第三に、スターリン的説明は、視覚的注意の対象が何であるかを上手く説

7) 実際、Phillipsが主張するポストディクティブ解釈の優位性を支持する実験報告も、近年提出されている(Holcombe and Goodbourn(2013), 394)。Sergent et al(2012)が提出した実験報告は、最初に与えられた刺激情報は意識されず、その直後に与えられたキューが無意識的な情報を意識的な知覚経験として顕在化させたことを示すものである。彼女た

ちは、現象的に意識されている情報と言語的に報告できる情報を同一にし、かつ、最初に与えられた刺激に関する知覚経験を、キューを与えた場合と与えなかった場合で直接比較できるようにした条件でポストキュー実験を行い、視覚的注意が意識レベルへと顕在化させたのは無意識の情報であったことを証明した。これはアクセスされていない現象的意識の

明できない(Phillips(2011a), 217)。この説明では、格子の知覚経験が起こる前にキューが知覚される。視覚的注意はキューの知覚の後に発動するわけだが、格子自体はキューの前に取り下げられているので、結局視覚的注意が何に向けられているのか不明である。

延長主義的説明は、これらの問題を回避している。第I節で見たように、延長主義とは、知覚経験に関しては、表象内容だけではなく心的状態も時間的に延長しており、各瞬間の知覚はこのような時間的に延長した知覚経験から派生的に説明されると考える立場である。延長主義的説明は、このように心的状態にも時間的構造を帰すので、第一の問題は生じない。また、Phillipsによれば、第二の問題も生じない。スターリン的説明の失敗は、知覚経験を構成する心的状態が時間的に延長していることを認めずに、最初に与えられた格子の知覚とキューの知覚を互いに独立のものとして見なしていた点にある。延長主義的説明においては、両者は互いに独立ではなく、格子の知覚はキューの知覚に「構成的に依存 (constitutively depend on)」している(Phillips(2014a), 136)。最初に与えられた格子の知覚は、「キューの後に続く格子」という時間的に延長した知覚経験が成立した後、その一部分として派生的に説明されるので、「最初に格子の知覚が独立のものとして成立し、そこから遅れて知覚経験が生じる」と言う必要はなくなる。第三の問題については、キューによる視覚的注意は格子自体ではなく、格子があった場所に向けられると解釈することで回避可能である(Phillips(2011a), 219-20)。延長主義的説明においても、格子の情報はアイコニック・メモリに保存されている。それゆえ、列の場所の情報さえ後に与えられれば、

前者の情報のどの部分に注意を払えばよいか十分に説明がつく。

以上の議論に基づいて、Phillipsは、延長主義的説明こそがポストディクティブ効果の適切な説明であると主張する。ここで、延長主義的説明に対する誤解を一つ退けておきたい。彼の説明では、キューを介した格子の知覚経験は、最初に格子が刺激として与えられた時点からキューの知覚を経て格子の知覚が生じる時点までの時間的延長を有していた。ところで、まだキューが提示されていない段階でも、被験者は格子に書かれた文字に対して「文字のようなものが書いてある」といった曖昧な知覚経験を有していると思われる。これはキューが提示されない場合の格子の知覚経験と同じであろう。そうすると、キューが与えられる場合でも、キューが与えられる前の知覚と与えられた後の知覚は、時間的に延長した一つの知覚経験の構成要素ではなく、やはり二つの知覚経験として区別する方が我々の直観に適うのではないか(佐藤(2012), 154-55)。だが、この反論に十分な説得力はない。第一に、キューが与えられる前に格子に関する曖昧な知覚経験が本当に存在したかどうかは、現象学的に微妙な論点である。第二に、仮にそのような知覚経験があったとしても、延長主義的説明はそれを取り込み得る。Phillipsはキューが与えられない場合の知覚経験とキューが与えられた後の知覚経験が持つ現象的性格 (phenomenology) を、それぞれ「一般的な現象的性格」、「特定の現象的性格」と区別している(Phillips(2011b), 402)。キューが与えられる前の格子の知覚は、延長主義的説明においては、たしかに時間的延長を持った一つの知覚経験の一部と見なされる。しかし、時間的延長を持つ知覚経験から派生的にそ

非存在を示唆するものであり、オーバーフロー・テーゼの確からしさを減少させる(cf. Kentridge(2012))。

8) スターリン的説明の擁護者にはTye(2003)がいる。

の知覚を説明する場合に、それが特定の現象的性格と同時に一般的な現象的性格を持つことを妨げるものは何もない。つまり、一般的な現象的性格は、後にキューが提示されるか否かに関わらず格子の知覚が有するものであり、この点が確保されている以上、彼の延長主義は我々の直観に反しているわけではない。

## IV オーウェルの説明

では、延長主義的説明の批判的検討に移ることにしよう。ポストディクティヴ解釈が正しい（オーバーフロー・テーゼは偽である）と仮定した場合、延長主義的説明のライバルには、前節で言及したスターリン的説明に加えて、「オーウェルの説明」と呼ばれる立場がある。本節では、オーウェルの説明に基づいてPhillipsを批判するKiverstein and Arstila(2013)の議論を取り上げ、彼らの立場には説得力がないことを論じる。

オーウェルの説明とは、Dennettがスターリン的説明の対抗理論として提案したものであり、George Orwellの小説『1984年』に因んで、ポストディクティヴ効果を、一旦形成された知覚経験が直ぐに記憶から消去され、その後に偽の知覚経験が順次形成されるという仕方でも説明するものである(Dennett(1991), 115-17)<sup>9</sup>。Phillipsが指摘するように、オーウェルの説明は、事実が正しく経験されているにもかかわらず、それが別の見え方で意識されているという主張であり、本当にこのような知覚経験の理解が整合的であるのかについては自明ではない(Phillips(2011b), 395)。だが、この説明には、スターリン的説明が含意する意識の遅延を認めずに済むという利点がある。この利点を活

かすために、Julian KiversteinとValtteri Arstilaは、「事実と見え(is/seems)の区別」(Kiverstein and Arstila(2013), 459)という問題を回避したオーウェルの説明を提案している。

KiversteinとArstilaが提案するオーウェルの説明は、ポストディクティヴ効果における最初の刺激の知覚を意識的な知覚経験ではなく、無意識の心的状態と見なす点に特徴がある(Kiverstein and Arstila(2013), 459)。従来のオーウェルの説明では、最初の刺激の知覚はあくまでも意識的な知覚経験であった。この設定は、被験者の知覚経験と被験者の主観的な見えが乖離するという問題を引き起こす。だが、最初の刺激の知覚を無意識のレベルで生じているものと見なせば、両者の乖離は生じない。むしろ、最初の刺激に関する無意識の情報は、その後どのような情報が入ってくるのかに応じて、順次アップデートされるものとして理解される(*Ibid.*)。KiversteinとArstilaは、このようなオーウェルの説明を「予測推論モデル」と呼び、その例をRick Grushが提案する「時間表象の軌道見積りモデル」に見出している(*Ibid.*, 460)<sup>10</sup>。Grushによれば、知覚経験は「(1) フィルタリング、(2) 予測、(3) 平滑化(smoothing)」という三つのプロセスによって産出される(Grush(2005, 2007, 2008); Kiverstein and Arstila(2013), 460)。知覚表象は外界から視覚に因果的に与えられた情報と主体がこれまでの知識に基づいて持っている期待とが組み合わさって形成されるが、主体が期待していたような視覚情報が与えられない場合も多々ある。(1)はこの対立を調停して環境についての正確な表象を形成するために、視覚情報が本来含んでいるノイズを取り除くプロセスである。(2)はノイズを取り除いた情報とこれまでの環境のモ

<sup>9</sup> Phillipsが指摘するように、オーバーフロー・テーゼはオーウェルの説明を前提している(Phillips(2011b), 395)。しかし、その逆は成立しない点には注意されたい。

<sup>10</sup> 彼らは、予測推論モデルのプロトタイプとしてEdmund Husserlの理論を挙げている(Kiverstein and Arstila(2013); Kiverstein(2010))。

デルを基に、新しい環境のモデルを予測するプロセスである。最後の(3)は、その予測とこれまでの見積もりを擦り合わせて、環境に関するモデルをアップデートするプロセスである。Grush自身はアップデートされる前の知覚表象が意識的か無意識的かについて明確な記述をしていないが、その知覚表象を無意識レベルの情報と見なせば、軌道見積りモデルは予測推論モデルの一種として解釈可能である。

では、予測推論モデルはどのように評価され得るのだろうか。KiversteinとArstilaによれば、このモデルが延長主義的説明に対して持つ利点は、ポストディクティブ効果の説明に時間的遅延を持ち込まないで済むことにある(Kiverstein and Arstila (2013), 461)。前節で見たように、Phillipsは延長主義的説明の利点として、ポストディクティブ効果の説明に遅延を持ち込まない点を挙げていた。だが、KiversteinとArstilaの診断では、延長主義的説明もスターリン的説明と同様に遅延を持ち込まざるを得ない。

*「彼[延長主義的説明の擁護者]は、時間的に延長した経験において時間的に後の部分が時間的に前の部分に影響を与えたり操作したりできるのは、我々の脳が出来事に関する何らかの確実な解釈に達する前にプロセス上の遅延を設けているからだ」と論じなければならない。」(Ibid., 458)*

ここで注意すべきは、彼らが指摘している遅延は、単に意識的な知覚経験が形成されるまでの遅延だけではなく、知覚情報が無意識のレベルで処理されるまでの遅延も含んでいるということである。部分報告法に関して言えば、延長主義的説明でも、

最初に与えられた格子の知覚情報は、キューによる注意が与えられるまではアイコンニック・メモリに無意識の情報として保存されることになる。たとえ形而上学的単位として時間的に延長した知覚経験を想定しても、最終的なアウトプットとしての知覚経験の形成メカニズムに遅延が実質的に組み込まれているならば、Dennettが指摘した不都合な遅延の誹りを免れることはできない。それに対して、予測推論モデルでは、最初の刺激情報は無意識レベルでの知覚として遅延なく成立し、それが順次必要に応じて改定されていくだけなので、不都合な遅延は生じない。

しかし、予測推論モデルに対しては幾つかの問題も指摘できる。第一に、このモデルはスターリン的説明とある種の親近性を持っている(Kiverstein and Arstila (2013), 459)。最初の刺激に関する知覚情報が無意識のプロセスで処理されると見なす以上、このモデルは、その情報が無意識的に保存されると考えるスターリン的説明と紙一重であり、また、両者は「意識的な知覚経験自体は時間的に延長せず、時間的に延長した内容を表象するだけだ」と考える点で共通している。そうすると、予測推論モデルが延長主義的説明よりも優位であることを確保するためには、Phillipsがスターリン的説明に対して指摘した「視覚的注意の対象は何か」という問題が解決されなければならない。だが、この点について、KiversteinとArstilaからの解答はない。第二の問題は、最初の刺激に関する知覚を無意識の知覚表象としたことの是非に関するものである。Dennettが提案したオーウェルの説明では、最初の刺激に関する知覚は、たとえ瞬時に忘却されるとしても、意識的経験として形成される。これは、意識的経験を産み出

すのに脳が必要とする時間を考慮したものであり、これによって、オーウェルの説明はスターリン的説明が含意する不適切な遅延を回避することができた。一方、KiversteinとArstilaは、知覚経験と見えの乖離を回避するために、最初の刺激に関する知覚を無意識とした。その場合、彼らには、最初の刺激に関する知覚がなぜ意識化されないのか、さらには、無意識の知覚がどのタイミングで意識化されるのかを説明する必要がある。だが、彼らはその説明を提供していない。また、最初の刺激に関する知覚を無意識とした時点で、彼らの予測推論モデルは、オーウェルの説明の利点を失っている。第三の問題は、予測推論モデルと延長主義的説明の実質的な違いは何かという問題である。上述したように、KiversteinとArstilaによれば、延長主義的説明では、最初の刺激の知覚は何の処理も受けずに無意識レベルで一定時間保存されることになる。また、それによって知覚状態と表象内容の構造上の合致が維持されている (*Ibid.*, 458)。しかし、これは延長主義的説明に対する誤解である。実際、最初の刺激に関する無意識の知覚表象の形成は、延長主義的説明においても許容され得る。例えば、KiversteinとArstilaが、Phillipsが無意識レベルでのプロセスの遅延を認めていた証拠として引用しているのは、Phillipsが「皮膚ウサギ錯覚 (the cutaneous rabbit illusion)」と呼ばれるポストディクション効果を論じた次の個所である<sup>11)</sup>。

「主体が第二の試行における $t+\delta t$ の時点で感じているのは何であろうか。もし (オーウェルの説明が主張するように) 手首への刺激だと答えるのを避けたいならば、 $\delta t$ は少なくとも240ms (+更なる処理

時間) の長さであると言わねばならないように思われる。この240msは、手首への刺激が後続の刺激に関する情報を基に再配置されるのに十分な時間である。」(Phillips (2014b), 150; Kiverstein and Arista (2013), 459)

KiversteinとArstilaによれば、240msは「無意識の知覚プロセスにおける遅延」を意味している (*Ibid.*)。しかし、Phillipsは刺激が手首からずれて意識されるまでの間として240msに言及しているだけであり、その間に無意識レベルで何も生じていないとは一言も言っていない。また、無意識レベルの知覚表象の形成を認めても、延長主義的説明が主張する心的状態と表象内容の構造上の合致も失われない。なぜなら、Phillipsが主張していたのは、時間的に延長した心的状態を形而上学的に基本的な単位とせよということだけであり、各時点における心的状態のそれぞれが時間的に延長した知覚経験から派生的な仕方別別の知覚表象を有していることを禁じてはいないからである。もし延長主義的説明でも無意識の知覚表象の形成が許容されるならば、予測推論モデルと延長主義的説明の実質的な違いはなくなる。別の言い方をすれば、最初の刺激の知覚経験を無意識とした時点で、予測推論モデルはもはやオーウェルの説明としての特徴を失ったのである。

以上の問題点から、KiversteinとArstilaが提案するオーウェルの説明に、十分な説得力を認めることはできない。意識的な知覚経験の忘却という無理のある設定を避けるためには、延長主義的説明やスターリン的説明が措定するような遅延を認めざるを得ないであろう。だが、この遅延は脳の情報処理速度と不整合を来すのではなかったか。

**11)** 皮膚ウサギ錯覚とは、被験者の手首から肘に向かって三か所を選び、それぞれを素早く五回ずつ叩いて刺激を与えると、被験者は自分の腕をウサギが跳ねて上ってくるように、刺激を分散して感じてしまうという錯覚である (Geldard and Sherrick (1972))。

次節では、この問題を念頭に置いた上で、ポストディクティブ効果の説明に関しては、延長主義の説明とスターリン的説明のどちらかを選ぶ決め手がないことを論じる。

## V | Phillipsによるスターリン的説明批判は成功しているか

第Ⅲ節で見たように、Phillipsはスターリン的説明を批判していた。しかし、以下で見るように、彼の批判には、スターリン的説明に対する延長主義的説明の優位性を確実にするほどの説得力はない。

Phillipsによるスターリン的説明批判は、次の三点であった。

- (1) スターリン的説明は、知覚経験の時間的構造を上手く説明できない。
- (2) スターリン的説明は、容認できない知覚経験の形成上の遅れを含意する。
- (3) スターリン的説明は、視覚的注意の対象が何かを説明できない。

残念ながら、これらの批判に十分な説得力はない。まず、(3)は濡れ衣だと考えられる。Phillipsによれば、延長主義的説明は、視覚的注意の対象をかつて格子が存在していた場所として解釈することで(3)を回避する。しかし、この戦略は、スターリン的説明にとっても使用可能である。実際、Phillips自身もその可能性を暗黙裡に認めている。

「これ [視覚的注意の対象を格子のあった場所にすること] をスターリン的説明における用語で表現

しようと試みる人がいるかもしれない。しかし、いかなるスターリン的説明も二つの疑わしい特徴を捨てきれないだろう。一つは、スターリン的説明には格子の提示と格子の経験の間に大きな遅延が生じるという特徴である。もう一つは、スターリン的説明においては、[格子を]提示する経験の時間的構造と経験において提示されているものの時間的構造の間に根本的な乖離が生じるという特徴である。」(Phillips(2011a), 219)

(3)と(1)(2)の間に内的な関連性はない。そうすると、この引用が示しているように、スターリン的説明にとって本当の問題は(1)と(2)であり、(3)は特に問題とする必要がない。

では、(1)と(2)は、スターリン的説明にとって本当に致命的なのであろうか。私は、これらの問題は解決可能か、あるいはたとえ解決できなくとも、スターリン的説明と延長主義的説明の間に差は出ないと考える。まず、(2)から説明しよう。Dennettは、スターリン的説明が含意する最初の刺激情報が意識的な知覚経験として処理されるまでの遅延は、実際に脳が行う情報処理の時間に収まらないと主張していた。仮にこの遅延がスターリン的説明にとって真正の問題だとしよう。だが、ここで延長主義的説明もスターリン的説明と同様に遅延を含意しているというKiversteinとArstilaの指摘を想起されたい。彼らの指摘は正しいと考えられる。Phillipsは、延長主義的説明では、時間的に延長した知覚経験が形而上学的に基礎的な単位となるので、ポストディクティブ効果について、最初の刺激に関する知覚情報を知覚経験全体から切り離して、「それが先に生じる」と言う必要はなくなると主張した。しかし、たとえ知覚経験を形而上

学的に基礎的な単位としても、そのことと知覚経験が形成される生理学的なプロセスは別物であり、後者については、最初の刺激に関する知覚情報は無意識レベルにあると考えざるを得ない。もしそうであるならば、(2)を根拠として延長主義的説明を選ぶことはできなくなるであろう。

さらに、そもそも遅延がスターリン的説明にとって本当に問題となるのかについても疑うことができる。第一に、Phillipsが指摘しているように、第Ⅲ節で見た部分報告法の例に関して300msの遅延が本当に脳の情報処理にとって問題になるか否かは、現在も係争中の事案である (Phillips (2014b), 149)。第二に、仮に遅延が本当に脳の情報処理に要する時間と合わないとしても、Dennett自身がこの問題を回避する手立てを示唆している (Dennett (1991), 122)。Dennettは色彩ファイ現象を引き合いに出して、スターリン的説明が遅延をどのように処理するかを説明している。色彩ファイ現象とは、視角四度の隔たりを持った赤と緑の二つの点に50msの間隔を置きながら150msずつ素早く連続して光を当てた場合、二つの点は往來するように見えるが、最初の点が次の点に向かう途中で突然変色するという現象である (Ibid., 114)。これは、まだ二つ目の点に到着する前に二つ目の点の色が知覚されるというポストディクティブ効果の一例であり、200ms以上の遅延は色の知覚が生じる時間内に収まらないと考えられる。この問題に対してスターリン的説明が取り得る解決策は、被験者は最初の点の色に気づく前に、無意識的な仕方その点の色に反応していたというものである。もちろん、この解決策の正しさは経験的に決着がつけられるべき問題であるが、少なくともこれは整合的な仮説である。

次に、(1)も、スターリン的説明より延長主義的説明を選ぶ良い理由とはならない。(1)はスターリン的説明批判の中で、最も根本的なものである。Phillipsは、時間的性質に関しては、知覚経験を構成する心的状態と表象内容は同型の時間的構造を有すると主張していた。彼はこの主張を「時間的経験の素朴な見解 (the naïve view of temporal experience; naïveté)」と呼び、次のように定義している。

「…経験の時間的構造は提示された世界の見かけ上の(apparent)時間的構造と合致する。」(Phillips (2014b), 142)

ここで「見かけ上の時間的構造」とは、実際の時間的特徴を錯覚している場合も含めての表現である。スターリン的説明は、表象内容が時間的構造を有することは認めるが、心的状態自体が時間的に延長していることは認めない。Phillipsは、スターリン的説明がコミットする「もし継起や時間的構造が経験されるならば、その経験はある瞬間においてなされる」という主張を「同時意識の原理 (the principle of simultaneous awareness; PSA)」(Phillips (2010), 179)と呼び、この原理を批判している<sup>12)</sup>。PSAの根拠は、第Ⅱ節で述べた、状態と内容の区別にある。一般に、表象媒体と表象内容が同じ性質を共有する必要はない。知覚経験に関しても同様であり、赤いトマトを表象している心的状態自体が赤色をしているわけではない。時間的性質に関しても、赤いトマトが机から落下する出来事を表象する心的状態自体が時間的に延長している必要はないように思われる。このようなPSAを批判するPhillipsの議論は多岐に渡るが、その中

<sup>12)</sup> PSAという呼び名は、Millar (1984) に由来する (Phillips (2010), 179)。

で中心的な役割を果たすのは、次の二つの論点だと考えられる。

第一に、状態と内容の区別は、時間的性質の知覚経験には当てはまらない (Phillips (2014b), 143-44)。たしかに、色や形などの性質に関しては、心的状態と表象内容が同じ性質を共有している必要はない。しかし、時間的性質に関しては、知覚経験はそれを表象するだけでなく、知覚経験自体が「時間の中」にある (*Ibid.*, 143)。このように時間的性質は特別であり、状態と内容の区別を時間的性質の経験に安易に適用してはならない。

第二に、知覚経験について状態と内容が共に時間的構造を持つことは、知覚経験を反省すれば否定できない (Phillips (2010), 183-84)。この論点は、Phillipsが「透明性 (Transparency)」と「見え→事実 (Seems→Is)」と呼ぶ二つの前提に基づいている。まず、透明性とは、「知覚経験の時間的構造については、それ自体は反省によって認識することができず、それが表象する出来事の時間的構造が反映されていると見なすことによってしか説明できない」という前提である。一般に、知覚経験は透明だと考えられる<sup>13)</sup>。すなわち、主体が自分の知覚経験を反省しても、発見できるのはそれが表象する対象の性質だけであり、知覚経験自体 (正確に言えば、心的状態) については何も認識することができない。Phillipsが言う透明性とは、この性質を踏まえた上で、知覚経験の時間的構造がどのように特定され得るかを述べたものである。次に、見え→事実とは、「知覚経験を反省した場合、それはまさに主観的に見えている仕方で存在している」という前提である。例えば、赤いトマトの知覚経験を反省した時、たとえ実際はそのトマトが緑であったとしても、少なくともその主観的な見えについては、

間違いは生じないということである。この透明性と見え→事実を前提した場合、知覚経験の時間的構造について、次の論証が構成される<sup>14)</sup>。

- P1: 時間的継起や延長の知覚経験を反省すれば、その表象内容は瞬間的なものではなく時間的継起や延長を有しているように見える。
- P2: 知覚経験を構成する心的状態の時間的構造は反省によっては認識できず、その表象内容の時間的構造が反映されていると見なすことによってしか説明できない。[透明性]
- P3: 知覚経験を反省した場合、知覚経験はまさに主観的に見えている仕方で存在している。[見え→事実]
- C: したがって、知覚経験を構成する心的状態は時間的継起や延長を有している。

しかし、以上の二つの論点には反論が可能である。まず、第一の論点については、我々は時間的性質の表象についても、状態と内容の違いを信じる合理的な根拠を有している。知覚経験は時間の中にもあるという理由から、Phillipsは「状態と内容は同じ性質を持つ必要はない」という一般的原理が時間的性質についても適用される保証はないと主張した。たしかに、知覚経験も時間の中に存在しているという指摘は正しい。しかし、そのことから知覚経験を構成する心的状態が表象内容と同型の時間的構造を持つと結論するのは早計である。実際、同じ存在様式を持つ状態と内容がその構造について乖離しているケースは存在する。例えば、空間の中にあるという存在様式を考えてみよう。紙に書かれた「私の前にいるのは猫である」という文は、私の前に猫がいるという出来事を表

<sup>13)</sup> 知覚経験の透明性の指摘は、Moore (1903) に由来する。

<sup>14)</sup> 以下の論証は、Phillips (2009), 183の論証を本稿の表現に合うように私が改変したものである。

象している。この文が書かれた紙も猫も共に三次元的な空間の中に存在している。しかし、この文と私の前に猫がいるという出来事は、同型の空間的構造を有しているわけではない。それゆえ、時間的性質の知覚経験について、たとえ心的状態と表象内容が共に時間の中に存在しているとしても、両者が同型の時間的構造を持つという主張に疑いを掛けることは決して不合理な態度ではないであろう。同じ反論は、第二の論点にも当てはまる。第二の論点を支える議論は、透明性と見え→事実という二つの主張を前提していた。この内、透明性の主張が正しいか否かは、結局のところ、「時間的性質に関しては、状態と内容の違いは成立しない」という第一の論点が正しいか否かに掛かっている。第一の論点に十分な説得力がない以上、第二の論点を支える議論の説得力もなくなる。

以上より、(1) (2) 共に、スターリン的説明を却下する十分な問題であるとは言えない。したがって、ポストディクティヴ効果に関しては、延長主義的説明をスターリン的説明よりも優先する決定的な理由は存在しないことになる。

## VI 結論

本稿では、Phillipsが唱える延長主義的説明について批判的に検討した。結論としては、少なくともポストディクティヴ効果の説明としては、彼の延長主義的説明はスターリン的説明に比べて優位であるとは言えない。たしかに、延長主義的説明はポストディクティヴ効果を整合的に説明することが可能であり、また、時間的に延長した知覚経験を基礎に据えるその形而上学も、特に我々の直観に反しているわけではない。しかし、「時間的性質

の知覚経験については、状態と内容の違いは当てはまらない」というPhillipsの主張は十分な説得力を欠いており、この区別に依拠したスターリン的説明を退けるには至らない。また、知覚経験の遅延や視覚的注意が向けられる対象の説明といった、スターリン的説明に向けられた他の懸念材料もある程度は解消可能であり、延長主義的説明と比べて説明力の低下を産み出すほどのものではない。もちろん、この結論はスターリン的説明が優れていることを示しているわけでもない。むしろ、両者の優劣は、ポストディクティヴ効果に関する説明力以外の観点から判定される事柄であると言えよう。

### 【付記】

本稿は「2012-13年度科学研究費補助金・若手研究(B)・課題番号20452229」に基づく研究成果の一部である。

#### 参考文献

- ◎Averbach, E. and Coriell, A. S. (1961) Short-term memory in vision. *Bell Systems Technical Journal* 40: 309-28.
- ◎Block, N. (1997) On a confusion about a function of consciousness. In Block, N. et al. (eds.) *The Nature of Consciousness. Philosophical Debates* (Cambridge, MA: The MIT Press): 375-415.
- ◎Block, N. (2005) Two neural correlates of consciousness. *Trends in Cognitive Science* 9: 46-52.
- ◎Block, N. (2007) Consciousness, accessibility, and the mesh between psychology and neuroscience. *Behavioral and Brain Sciences* 30: 481-99.
- ◎Breitmeyer, B. G. and Ogmen, H. (2000) Recent models and findings in visual backward masking: A comparison, review, and update. *Perception and Psychophysics* 62(8): 1572-93.

- ◎ Byrne, A. (2009) Experience and content. *Philosophical Quarterly* 59: 429-51.
- ◎ Casati, R. and Varzi, A. (2010) Events. In Zalta, E. N. (ed.) *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, URL = <<http://plato.stanford.edu/archives/spr2010/entries/events/>>. (最終アクセス: 2014/04/14)
- ◎ Coltheart, M. (1980) Iconic memory and visible persistence. *Perception and Psychophysics* 27: 183-228.
- ◎ Crick, F. and Koch C. (2003) A framework for consciousness. *Nature Neuroscience* 6(2): 119-26.
- ◎ Dainton, B. (2010) Temporal consciousness. In Zalta, E. N. (ed.) *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, URL = <<http://plato.stanford.edu/archives/spr2014/entries/consciousness-temporal/>>. (最終アクセス: 2014/04/14)
- ◎ Dennett, D. C. (1991) *Consciousness Explained*. Boston MA: Little Brown & Co. 山口泰司訳(1998)『解明される意識』(東京: 青土社)
- ◎ Dretske, F. I. (2006) Perception without awareness. In Gendler, T. S. and Hawthorne, J. (eds.) *Perceptual Experience* (Oxford: Oxford U. P.): 147-80.
- ◎ Eagleman, D. M. and Sejnowski, T. J. (2000) Motion integration and postdiction in visual awareness. *Science* 287: 2036-38.
- ◎ Enns, J. T. and Di Lollo, V. (2000) What's new in visual masking? *Trends in Cognitive Sciences* 4: 345-52.
- ◎ Geldard, F. A. and Sherrick, C. E. (1972) The cutaneous "rabbit": A perceptual illusion. *Science* 178: 178-79.
- ◎ Grush, R. (2005) Internal models and the construction of time: Generalizing from state estimation to trajectory estimation to address temporal features of perception, including temporal illusions. *Journal of Neural Engineering* 2(3): 209-18.
- ◎ Grush, R. (2007) Time and experience. In Müller, T. (ed.) *Philosophie der Zeit: Neue analytische Ansätze* (Frankfurt: Klosterman): 27-44.
- ◎ Grush, R. (2008) Temporal representation and dynamics. *New Ideas in Psychology* 26: 146-57.
- ◎ Harman, G. (1990) The intrinsic quality of experience. *Philosophical Perspectives* 4: 31-52. 鈴木貴之訳(2004)『経験の内在的質』信原幸弘編『シリーズ心の哲学III 翻訳編』(東京: 勁草書房)所収: 85-120.
- ◎ Holcombe, A. O. and Goodbourn, P. T. (2013) Christopher Mole, Declan Smithies, and Wayne Wu, eds. *Attention: Philosophical and Psychological Essays. Philosophy in Review* 33(5): 391-95.
- ◎ Hollingworth, A. and Luck, S. J. (2008) Visual memory systems. In Luck, S. J. and Hollingworth, A. (eds.) *Visual Memory* (Oxford: Oxford U. P.): 3-8.
- ◎ Irwin, D. E. and Thomas, L. E. (2008) Visual sensory memory. In Luck, S. J. and Hollingworth, A. (eds.) *Visual Memory* (Oxford: Oxford U. P.): 9-41.
- ◎ Kentridge, R. (2012) Visual attention: Bringing the unseen past into the view. *Current Biology* 23(2): 69-71.
- ◎ Kiverstein, J. (2010) Making sense of phenomenal unity: An intentionalist account of temporal experience. *Royal Institute of Philosophy Supplement* 67: 155-81.
- ◎ Kiverstein, J. and Arstila, V. (2013) Time in mind. In Dyke, H. and Bardon, A. (eds.) *A Companion to the Philosophy of Time* (Malden: MA: Wiley-Blackwell): 444-69.
- ◎ Kolers, P. A. and von Grünau, M. (1976) Shape and color in apparent motion. *Vision Research* 16: 329-35.
- ◎ Lamme, V. A. F. (2003) Why visual attention and awareness are different? *Trends in Cognitive Science* 7: 12-18.
- ◎ Miller, I. (1984) *Husserl, Perception, and Temporal Awareness*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- ◎ Moore, G. E. (1903) The refutation of idealism. *Mind* 7: 1-30. 神野慧一郎訳(1987)『観念論論駁』坂本百大編『現代哲学基本論文集II』(東京: 勁草書房)所収: 1-49.
- ◎ Phillips, I. (2010) Perceiving temporal properties. *European Journal of Philosophy* 18: 176-202.
- ◎ Phillips, I. (2011a) Attention and iconic memory. In Mole, C. et al. (eds.) *Attention: Philosophical and Psychological Essays* (Oxford: Oxford U. P.): 204-27.

- ◎Phillips, I. (2011b) Perception and iconic memory: What Sperling doesn't know. *Mind and Language* 26: 381-411.
- ◎Phillips, I. (2014a) Experience of and in time. *Philosophy Compass* 9: 131-44.
- ◎Phillips, I. (2014b) The temporal structure of experience. In Lloyd, D. and Arstila, V. (eds.) *Subjective Time: The Philosophy, Psychology, and Neuroscience of Temporality*(Cambridge, MA: The MIT Press): 139-58.
- ◎Prinz, J. J. (2012) *The Conscious Brain: How Attention Engenders Experience*. Oxford: Oxford U. P.
- ◎Reid, T. (1855) *Essays on the Intellectual Powers of Man. In The Works of Thomas Reid*, vol. 1, 7<sup>th</sup> ed. (Edinburgh: Maclaghlan and Stewart, reprinted by Adam Media Corporation(2005)): 213-508.
- ◎佐藤亮二(2012)「意識経験と報告可能性—ブロックのメッシュ論証に抗して—」東京大学教養学部哲学・科学史部会『哲学・科学史論叢』14: 131-64.
- ◎Sergent, C., Wyart, V., Babo-Rebelo, M., Cohen, L., Naccache, L. and Tallon-Baudry, C. (2012) Cueing attention after the stimulus is gone can retrospectively trigger conscious perception. *Current Biology* 23: 1-6.
- ◎Sperling, G. (1960) The information available in brief visual presentations. *Psychological Monographs: General and Applied* 74: 1-30.
- ◎Surprenant, A. M. and Neath, I. (2009) *Principles of Memory*. New York and London: Psychology Press. 今井久登訳(2012)『記憶の原理』(東京:勁草書房)
- ◎Tye, M. (2003) *Consciousness and Persons*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- ◎Tye, M.(2006) Content, richness, and fineness of grain. In Gendler, T. S. and Hawthorne, J. (eds.) *Perceptual Experience* (Oxford: Oxford U. P.): 504-30.

## Is Perceptual Experience Temporally Extended?

Seishu Nishimura

Postdictive effects are phenomena wherein the perceptual experience of an initial stimulus is affected by a second stimulus that is given immediately after its offset. These phenomena attracted a great deal of attention of philosophers because it seems mysterious how the nature of the perceptual experience of the initial stimulus is determined by the second stimulus *in a backward way*.

A number of models have been proposed for these perplexing phenomena. Recently Ian Phillips has developed the so-called “extensionalist model” of postdictive effects. The other previous models assume the claim that perceptual experience is a momentary mental state which represents either a snapshot of the scene or a temporally extended event. By contrast, Phillips maintains that perceptual experience is a temporally extended mental state and this extended experience is “metaphysically prior to” the momentary perceptions that constitute it (Phillips, I. (2011) “Attention and Iconic Memory,” 219). Hence, the perception at each moment is explained by the whole extended experience in a derivative way. If the extensionalist model is correct, we can explain the backward modulation of the perceptual experience of the initial stimulus by that of the second one as the formation of one temporally extended perceptual experience in which the perception of the initial stimulus “constitutively depend[s] on facts about later experience”

(Phillips, I. (2014) “Experience of and in Time,” 136).

My aim in this paper is to show that Phillips’ arguments for the extensionalist model are not fully successful. *Pace* Phillips, his extensionalist model is no more advantageous than one of its rival models in explaining postdictive effects.